

Title	最近の源氏物語成立論について
Author(s)	田中, 裕
Citation	語文. 1952, 6, p. 34-41
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68406
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

最近の源氏物語成立論について

田 中 裕

最近の源氏物語研究の中で、最も人々の関心を集め、論議をよんだのは、武田宗俊、風巻景次郎、池田龜鑑氏らの成立論であった。いづれも本文批判の道を通して、巻々の執筆順序を定め、物語の原形並びに現存形態成立の事情を推定しようとするもので、つまりは内証による形態研究なのである。しかしこれらの諸論考によせられてゐる関心の強さを考へると、それは、単に外証による研究がもう限界に達してゐるといふためではなくて、むしろ物語細部の諸矛盾を摘出し、その構造聯繫を明らかにすることに於いて、この物語が本来ありえた形を構成してゆくこの方法と成果とが、やがて構想の展開、制作主体のあり方の究明にまで発展しうるやうな切れの深さを予見させてゐるところにあるといつてよいと思ふ。こゝで最近といふのは二五年度以降のことであるが、

叙上の諸家の研究は愈々精力的に進められてゆくやうであり、その批判も漸く活潑にならうとしてゐるばかりなのである。ところでこの方面の研究は、大正十一年和辻博士がホメーロス批判の方法を移して試みられた「源氏物語について」(「日本精神史

以来、島津久基博士(源氏物)、池田龜鑑博士(「日本文学大」を「辞典」解説)を

じめ、青柳秋生氏(「源氏物語執筆の順序」国語)、玉上琢彌氏(「源語成立放」国語)と国文学、昭一四・八一九(「国文、昭十五・四」)らにそれぞれ充実した論考があり、最近の叙上の諸研究が提出してゐる立論の諸根拠、着眼点のいくつかは、すでにそこに胚胎してゐたことを思ふのである。

まづ成立論議の端を開いた武田宗俊氏の「源氏物語の最初の形態」上下(「文学、昭二五・六一七」)から見ゆくと、氏は、この物語の構成を三部に分ける従来の説を肯定されつゝ、第一部(桐壺から藤裏葉まで)成立の後、第二部(幻まで)、第三部(夢浮橋まで)はつゞいて書かれたとして、問題の焦点を第一部成立の上にしほり上げ、その構成と成立順序について次のやうな明快な結論を導かれる。即ち、第一部は構成上、桐壺以下若紫・紅葉賞・花宴・葵・賢木・花散里・須磨・明石・漆標・絵合・松風・薄雲・權・少女・梅枝・藤裏葉の十七帖と、帚木・空蟬・夕顔・未摘花・蓬生・関屋・玉鬘・初音・胡蝶・螢・常夏・篝火・野分・行幸・藤袴・真木柱の十六帖との二群にはっきり分けられ、中間に立つて所属のまぎらひしい巻のないことを諸根拠をあげて指摘され、二群をそれぞれ主要人物の名によつて、紫上系・玉鬘系と名づけられ

れる。その中前者は桐壺から出發して、それ自身で十分に纏った長篇的構成をもち、かつ独立した物語として後者を予想しないでも成立しうるのに対し、後者は雨夜の品定から出發してまた一の統一をもつてはゐるが、事實は短篇の説話群といふべく、前者を背景としその影響をうけてゐる。つまり關係は一方的なのである。しかも現形のやうに、両者が複雑に組み合はされてゐる継ぎ目では、常に物語の流れの中断や年月の逆行等の不自然な事實が見られること等を綜合して、最初この物語は紫上系十七帖で完結してゐたが（原源氏物語）、後に玉鬘系十六帖を執筆、挿入したものと推定されたのである。この後記挿入を立証する論拠の中、最大のものは、玉鬘系の人物が同系の巻々にも現はれ、紫上系に全く現れないことにあるといつてよい。

しかしこの着眼点及び立証の手續、結論の一部は、すでに青柳氏が帚木以下須磨までの巻々について、若紫・紅葉實以下須磨前半に及ぶ「若紫グループ」と、帚木・空蟬・夕顔・末摘花を含む「帚木グループ」とを分けられ、前者が後者を前提しないことを人物の出入の上で立証して、後者を後記挿入したものと考へられたところに示されてゐるのである。だから武田氏の注目すべき成果も結果からいへば、右の手續を普く第一部全体に適用し、その性能を仔細に検討し確認されたものといふべきであらうか。玉上氏も青柳氏説への反論としてとあるが、梅枝・藤裏葉の二巻に玉鬘の並の人物の出でこないことを注意してゐられるのである。

武田氏のあげられた論拠はこのほか多面にわたり、物語の本文と紫式部日記との対照によつて紫上系や第一部全体の成立時期を推定する等のことも試みられてゐる。むしろ立証力は一様でない

けれども、これらの論拠がそれぞれ、問題点の優れた指摘になつてゐることば疑はれまいと思ふ。

玉鬘系の後記挿入説の大意は、いち早く学界の支持をえたかの観さへあるが、最も詳しく反駁されたのは、岡一男氏「源氏物語成立論批判」(国文学研究 昭二六・一一)である。これは物語の現形を發表当初のまゝとする立場からのもので、列挙された難点の中、例へば惟光と小君、槿の姫宮、帚木冒頭の詞等に関するものはこの物語の最初の数巻のもつ複雑さを指摘して有意義であるが、前説を否定しざるほどの力もちえないやうである。

武田氏の成立論の骨子は、紫上系と玉鬘系とを峻別したこと、次に後者の後記挿入といふ成立上二次の過程を析出されたこととにあるが、論議をよんでゐるのは後者である。これをいひかへると玉鬘系、就中、帚木以下三帖と玉鬘以下十帖との二群はいかに紫上系に結びつくか、その關係の仕方の問題についてであり、末摘花・蓬生・閨屋の場合はやゝ單純なのである。

まづ帚木以下三帖と紫上系とはいかに結びつくであらうか。こゝに結合の楔として介在するのが「かゞやく日の宮」の巻である。周知のやうにこの巻の存在は、定家がその著「奥入」に一説としてあげたばかりで、しかも同じ注記には少くとも当時これの現存しなかつたことが語られてゐる。のち河海抄、岷江入楚もこれを引くに止まつてゐたが、物語の構想乃至は成立論上の要請としてはじめてこの一説の意義を認めたのは玉上氏であった。氏は物語の現形を發表当初のものと見る前提に立つて一往、帚木起筆を考へられるので、その限りでこの巻がもつ種々の不安定さを充すために「かゞやく日の宮」の伝承に着目し、これによつて帚木冒頭

の書き出し方、帚木以下三帖の挿話性、更にはじめ数帖に重要人物の隠されてゐる理由等を解決しようとする。そこで「日の宮」には、特に藤壺が印象強く出てゐたであらうが、主題は源氏と御息所との恋にあつたこと、種の姫宮や花散里、筑紫の五節との交渉なども点出されてゐたこと等を想定されたのである。だが氏と武田氏ほか最近の諸説との間にある大きな相異は、前者が和辻博士の着想を活かして、この巻を現存物語とは異なる先行の「源氏物語」と考へられるのに対し、後者はいづれも帚木以下三帖の後記挿入といふ共通の想定の上に立つて、若紫に先き立つ原源氏物語中の一卷と見、定家の所伝を正しく承けてゐる点であらう。従つて巻の主題も、その名の示す通り、藤壺と源氏との關係にあつたといふ風に動いてきてゐるのである。この転換を劃するのは、武田氏の前掲論文で、そこでは「日の宮」削除の後、帚木以下三帖がこれに代つたことを説かれてゐるが、この説を詳しく敷衍して発表されたのは、後の「源氏物語紅梅の巻の位置と輝く日の宮の巻」(国語と国文学、昭二六・九)であるから、しばらく池田、風巻氏の説から解説してゆかう。

池田博士は「日本名作研究第一輯」(昭二三・八)所収「源氏物語の成立過程」(談話)の中では、まだこの巻にさほどの関心を示してゐられないが、「新講源氏物語」(昭二六・二刊)に至つてははっきりした結論を出されてゐる。氏は、桐壺を藤裏葉成立後の書き添へと見て、現形では若紫にはじまるとされるのであるが、かくして最初に來るのは藤壺物語とでもいふべき筋であり、その発端としては若紫の前にどうしても第一「かゞやく日の宮」を予想せざるをえず、それは藤壺を主人公として御息所を配した

もので、宣長の年立によれば源氏十三才から十六才までの四年にわたる記事の空白を埋めうる物語であらうと考へられる。さうして帚木以下三帖が後記挿入され(少女執筆後か)、更におくれて桐壺の書かれた前後、恐らく後に、故意か恐らく偶然の事情で脱落したまゝ補ひがつかずに了つたとされるやうである。だがこの書では結論しか示されてゐないので詳しい理由は分らない。

次に風巻氏の「源氏物語の成立に関する試論」(国語論文、昭二六・五)になると、この「日の宮」の存在の仮説には、ある動かし難い理由が附せられてくる。即ち氏は、武田氏のいふかの玉鬘系の巻々が、中世のいはゆる「並」の巻と帚木・玉鬘の両巻とを合はせたものにはかならないことに注目される。そこで一歩進んで、この両巻も、本来は並であつたものが、後にそれらの附屬してゐた太系の巻の脱落によつて、代つて本系にせり上つたのではないかと想定し、玉鬘に対しては「桜人」、帚木に対しては「日の宮」をそれぞれ脱落の巻に擬せられたのである。もしこの解釈が許されるなら、玉鬘系と並とは完全に一致するわけであり、玉鬘系とはいひかへれば、古來その意味の曖昧であつた並を新しく成立論的に意味づけたものといふことができる。氏のこの想定を助けるのが、「一説には巻第二かゞやく日の宮、並の一掃入、空蟬はこの巻にこめたり」と記す奥入の説なのである。おもふに定家がこの一説を顧たのは、現形の空蟬が帚木の並(定家は同時に平行する巻と解する)ではないといふ自己の疑問を支へるものとしてであり、「日の宮」に対する関心もまたそれ以上のものではなかつた筈であるから、氏がこの巻に要請されるもの、またその烈しさにはいさゝかもかゝはらないのであるが、しかし、伝承の一説の上に自

己の疑問を託さうとする態度には共通のものがあつたといへる。

次に氏の手続は、帚木以下三帖が形においても一群としての纏りをもつてをり、現形のやうに帚木だけが別扱ひされる理由のないことの論証にむけられ、かくしてそれらが共通に所屬してゐた本系の巻の存在を想定されるのである。以上の限りで氏の説明は成功してゐるであらう。しかしこのやうな形態的考察を肉づけするのであらうか。氏が形態上これに対比される、玉臺の一群と桜人との場合は、後述の如く広狭の關係とされるので、後者の消失の理由もそれとして理會されるけれどもこの場合はさうでない。帚木の一群の内容は、藤壺・御息所らを主人物とするといふ「日の宮」に対して、全く別系の主題、人物を貫いてゐることは見られる通りであり、前者は單純に後者に代置しえないからである。両者はどの程度に重なり合つてゐたか。年立上の關係はどうか。帚木の一群成立と「日の宮」の消失とは直接に聯繫してゐるか、あるとすればその理由は何か。あるいは池田博士の説かれるやうに偶然のものであつたか等である。帚木以下三帖と若紫との間、更に桐壺とのつながりには、ある中斷が確かにあるから、この問題には次の玉臺以下十帖の場合以上に複雑であらうと思はれる。

氏が最後に、空蟬と夕顔とは本来独立した短篇であり、それを後に一纏めにする時、その總序として品定が書かれたこと、のみならず品定の書き添へはこの一群を越える意圖をもつてゐたこと等を少からぬ辭句の修正を賭してまで主張されようとするのは、以上の問題に關聯してのことであらうが、いかに説明されるか、続稿に期待されねばならない。

また高橋和夫氏には「桐壺の巻の成立をめぐる諸問題」(日本史研究 昭二五・九一十)があつて、これにふれてゐる。氏は桐壺を三の主題に分ち、源氏の生ひ立ちと藤壺の登場とを含む第二・三主題を若紫に先き立って成立したものとされ、「日の宮」はそれと「帚木の並び同時の部分」とを含めた内容をもつもの、年立でいへば十三才から十七才にわたるもので、むしろ欠卷Xと名づけた方が適當であると考へられてゐる。

武田氏の論は前掲「輝く日の宮の巻」に詳しい。氏は池田・風巻氏らのやうに桐壺を後の書き添へとは見ず、桐壺・若紫のつきを最初からのものと考へられてゐるが、しかし現形に見る若紫の書き出しは素直に桐壺につゞかない上、間に六年の空白を挿んでをり、そこに幾多の恋の閑歴が予想されることを例示して、こゝに欠卷「日の宮」の存在を想定される。さうして帚木以下三帖は本来、「日の宮」に並置する意圖で書かれたのであるが、それを除外しても大きな支障をきたさないとところから、意識的に削除されたものであらうと推定されるのである。

いふまでもなく「かゞやく日の宮」の語は桐壺の終りに見えてゐて、藤壺を讚へる称呼であつたし、中世では桐壺の替名として伝へてゐる。この所伝を採り、かつ奥入の注に「この巻もとよりなし」とあるのを信じて、叙上の成立論的仮設を否定しようとする岡氏や三宅清氏「輝く日の宮考」(国語國文、昭二六・七)の主張もある。奥入の本文についていへば、一説の真偽は積極的に肯定もされなければ否定もされない。三宅氏が「輝く日の宮と言ふ巻名が一説としてあつたと言ふ事は、必ずしもその実体が存在したと言ふ意味はもたぬ。源氏物語研究史のあらゆる部分に於てその実体の証

蹟が見出されない限りその実存説は否定せられなければならない」といわれるのは厳密を期する文献学の立場からは尤もであるが、しかしそれは直ちに叙上の成立論を拘束するものではない。こゝで「日の宮」の存在は事実といふよりもまづ要請であり、その信憑性は研究史的に確められるのではなくて、現形の物語の包蔵する細部の矛盾がこの巻の設定によっていかに合理的に解かれるかその可能性の如何にかけられてゐるからである。その可能性の信じられる時、一説の所伝は定家の意図如何にかゝはらず、稀有の啓示となるわけであり、またその現実性をも高めるであらう。従つてもし研究史的厳密を期するなら、「日の宮」はしばらく欠巻Xの象徴と解して差支ないのである。

しかし謙つて思ふに、これらの成立論が、諸矛盾の合理的解決を目的とし、またそれを方法的に貫かうとする限り、必ずや限界に衝きあたることも予想される。たとへば「日の宮」が想定される通りの内容をもつとすれば、その分量は他の巻に比してやゝ大部にすぎるとなるのではなからうか。自然の理法でなく、物語に対する仮設の設定に当つては、やはり本来の省筆、乃至は制作主体の中に働く種々の偶然等、その合理性の貫徹を歪めるいくつかの事情を商量すべきではなからうか。(帚木冒頭の序詞も単なる並の書き出しとしては不自然であるかもしれない。)だがその正しい会得に達するために合理性を徹底することは必要である。「日の宮」の仮設もそれが成立つと否とを問はず、それ自身を亡すところまで検討しつゞけられねばならないと思ふ。

次に玉鬘以下十帖と紫上系とはいかに結合するであらうか。

武田氏の説は帚木の場合とはゞ同様で、もと少女と梅枝との間

には一巻があつたが、玉鬘以下十帖の挿入によつて代置されたとし、それを伊行積に名の見える「桜人」に擬せられた。しかし桜人は積所引の本文から窺へば玉鬘系に属することは明らかなので、この矛盾に対しては批判も出(秋山陵氏「日本文学史研究」)、氏もまた「源氏物語最初の形態再論」(文学、昭二七・一)で欠巻Xと訂正された。氏の構想の上に立つて、これを新たに年立の観点から展開されたのが風巻氏の「源氏物語の成立に関する試論」(上下) (昭二五・一二、昭二六・一)である。

年立即ち年譜制作の条件は、一に各巻がうちに含む年数及び巻々相互の間の相対的な年次関係の確定であり、次に新旧年立の如く光源氏の年齢を算定の基準とする場合には、各巻における源氏の年齢の確定といふことであらう。前者については、たとへば錯雑するにせよ算定の手がかりに欠けるわけではなく、新旧年立も玉鬘を除けば一致するのであるが、後者となるとその明記されたものは藤裏葉にはじめて「あけむ年四十になり給ふ」とあるのと、柏木に「五八を十とりすてたる御齡」とある位のものである。これによると藤裏葉において源氏三九才、柏木で四八才となるが、これを算定の枠とすれば藤裏葉・若菜上下・柏木、それに藤裏葉と同年の物語である梅枝の五巻の年立は、まづ完全に確定することができる。そこで問題は梅枝以前、若紫に至る(桐壺から夕顔までは別)巻々の年立で、それは前者を基準として逆算するほかにすべはないのである。こゝで風巻氏は一たび光源氏を離れて紫上の年齢を注視される。すると若菜下に三七才と明記されてゐるばかりでなく、溯つて若紫にも「十ばかり」とあり、しか

も次の紅葉質には「十にあまりぬる人は」とあって若紫での年齢は十才と見られるので、こゝに一つ有力な基準を捉へることができるのである。さて紫上三七才の年は源氏四七才であり、両者の差の十才は動かないから、紫上十才に当る若紫での源氏の年齢は二十才とならねばならない。ところが中世の旧年立では十七才、宣長の新年立では十八才となつてをり、三乃至二才の開きが出るのである。理由は新旧年立が、藤裏葉乃至梅枝を基準として逆算するその過程の中に含まれてゐるであらうから、そこで氏は、前に若紫で算定した源氏、紫上の年齢から出発して、順次巻々における二人の年齢を割り出してゆかれる。さうして少女では源氏三七才、紫上二七才となるべきこと、それは前述の源氏三九才、紫上二九才に当る梅枝（藤裏葉）とは間に一年をおいて接続する筈になること等を確められる。いひかへれば現在の玉盞以下十帖は年立上、一年の物語に押しつめられるわけになるが、しかし事實は四年にわたつてゐるのである。この喰ひ違ひは、もし若紫と梅枝との二基準がそれぞれ不動のものである限り、物語自身のもつ矛盾といはねばならず、そこで氏は本来一年であつた物語が後に四年の長さに敷衍、發展させられたものと想定され、一年を叙した原形の一卷を武田氏が最初に考へられたやうに、「桜人」に擬せられたのである。かう考へると現存の物語はそれ自身のうちに三年といふどうしても解決できない年数を含むのであるが、新旧年立はこれを少女以前の巻々の上に順次繰よせることによつて消し去らうとする。即ち旧年立は三年をそのまゝ、新年立は玉盞と少女とを重ね合はす（前者は三四・五才、後者は三三・四・五才）ことによつて二年を繰よせてをり、こゝに新旧年立の間

に一年の差が生れる理由が見られるわけである。このやうにして氏の説は、武田氏の説を新たな観点から実証されたことになるが、大きな相異をいへば、一年の物語を四年に敷衍し發展させたこと、次に原形は「桜人」であるが、氏はその性質に留意して、こゝで紫上・玉盞の両系が合流したと考へられること、更に若菜下における紫上の三七才を算定の基準とするところから、後記挿入の時期を若菜・柏木あたり成立以後とされねばならなかつたこと等である。しかし以上の想定は可能であらうか。氏の構論は新旧年立の比較、「並」の觀念を介在させての新年立に対する反駁を通して進められるので、やゝ多岐にわたつてゐるが、要は記事年のことであるから、問題は新旧及び氏の年立のいづれが一層無理なく、この物語の含むすべての記年的事實を包摂しうるか、といふことではなければならぬ。新旧年立について氏は、上編で前者の合理主義に対して後者の実証性を賞揚されながら、結局は前者の成果を評価せざるをえない形となつてをり、合理性、実証性の意味も曖昧である。両年立の優劣については諸説はなほ対立してゐる（高橋和夫氏「二条院と六条院」国語と国文学、昭二）が、それは兎も角、氏の年立を新旧のそれ以上に困難にする理由、即ち新しく起る様々な矛盾については叙上の高橋、秋山、武田の諸氏によつてすでに十分數へられてゐると思ふ。

紫上の年齢に端緒を捉へた氏の考察も、中世以来留意されてきた年立上の疑問を徹底的に追究されたものといつてよいが、紫上を若紫で十才と限定するところにすでに問題はあると思ふ。同じ巻に、その母を記して「亡せてこの十年あまりにやなり侍らむ」とあるのを固執すれば、紫上は少くとも十才以上と見なければな

らないし、紅葉賀での年齢も十一才と限る必要はなく、氏もある個所で「少くとも十一・二才とする」と記されてゐる程度で十分なのである。この数字が一年でもずれることは直ちに氏の結論にひきわけであるが、これは新年立が玉鬘巻にいふ「二十才ばかり」を二十才に限定しようとしたのと同じ無理を強ひるものであらう。この物語自身にも年数の矛盾はあるけれども、それは氏の言はれるほどではなく、むしろ誤謬は一・二年は前後に動きうるやうな含みをもつこの物語の記年表現を、強ひて一定年次に限定しようとする年立作者の手續の方にあらうと思ふ。

氏の年立のひき起す新たな矛盾を氏自身、若菜の巻に二ヶ所指摘されて、これを挿入後の修正と説明される点も、もし修正の觀念を導入されるなら、むしろ三七才といふ基本的な数字を反省されるべきであつたかと思ふ。この点宣長は「玉の小櫛三人々の年立」で周到に論じてゐるのである。

次に氏は、前述のやうに新年立が玉鬘と少女とを重ね合はせ、玉鬘以下十帖のもつ三年のたるみを消去しようとしたことに對し、これは玉鬘を少女の「並」化して、古来の伝承を犯したものと厳しく批難されてゐるが、疑問である。「並」の伝承は尊重すべきであり、最近の成立論議こそそれを深く思はせるものであるが、しかしその意味は何であらうか。「同じ期間に重り合ふ」ことは若紫と末摘花、漣標と蓬生・関屋の場合の如く、並のみに見られる事実ではあるが、しかし並の意味そのものでなかつたことは確かである。並については、氏が次の論考（前掲、国語）で提起された通り、玉鬘系の巻々を紫上系に後記挿入するに當つて前者を後者（いはゞ本系）から區別して呼んだものとするのが、恐らく

現在では最も包括的な解釈かと思はれるが、その場合本系への結びつけ方は一樣でなく、若紫や漣標の並のやうに單純に、時間的に平行の關係で構想されるものもあれば、この玉鬘の並のやうに本系と合流し、兩者融合的に構想されたかと推定されるものもあり、帚木の並の如きはまた異つた形式をもつてゐるかと思ふ。

（第二部の横笛の並は継起の關係にある）。このやうに並べ方が多様な形式をとるとすれば、玉鬘の重ね合はせがたとへ年立上無理な解釈であつたとしても「並」の名で批難するには当たらない。両巻の重なりを常態といへないことは確かであるが、しかし宣長の纏述するやうにそれはやはり正しいのであり、恐らく六条院の叙述の中に、新しく玉鬘を登場させるその発端の巻としての構想上の必要に迫られた処置であつたかと思はれる。

玉鬘以下十帖の原形を「桜人」に擬せられたことも、次の梅枝・藤裏葉が紫上系なのであるから、玉鬘系後記挿入説を前提とする以上、穩やかでなく、やはり武田氏が後に欠巻Xと訂正されたのに従ふべきであらう。またもし「桜人」が原形であるなら、精粗の差こそあれ、兩者には主要な記事・叙述の重複があらうから、それは一読して感得される筈であり、伊行が「この巻はある本もあり、なくてもありぬべし」などと微温的な言葉挿みえたか、また「螢が次にあるべし」など局所的に処理しようとして怪しまなかつたか疑はしく思ふ。「桜人」の推定内容は早くは堀部正二氏（『中古日本文』）また池田博士「新講」に詳しいが、その作者の誰かは問はず、玉鬘以下十帖に属しうる、しかしそれと重複しない部分的な内容の一卷であつたと見るべきであらう。

叙上、武田、風巻両氏とも後記挿入説をとつてゐられるが、帚

木以下三帖と異り、この十帖には、たとへ前後のつゞきに不自然さが感じられるとしても、少女の内容はよく受けつがれてゐるし、後帖との間に辞句の照応もあるので、あへてこゝに欠巻を仮設し後記代入を考へる必要を認めないとする説も少くない。武田氏に對する岡氏のほか、森岡常夫氏の批判（「源氏物語に於ける対立二五」）もそれであり、池田博士も少女から梅枝・藤裏葉へとつゞく筆と平行して、初音から真木柱に至る玉鬘系が作られ、それらを結合するために玉鬘を書いて少女の次に配したと考へられてゐる。証明は省かれてゐるので詳論を待たねばならないが、兎も角少女と玉鬘とのつゞきには問題が伏在してゐるのである。玉鬘以下十帖と紫上系との結合を考へるために重要な問題点のいくつかは、武田氏「再論」に詳しく列挙されてゐる。

以上によつて、源氏物語第一部に關する成立論議の概要を解説したのであるが、こゝに示されてゐる想定や仮設——紫上系と玉鬘系、後者の後記挿入、かゞやく日の宮、桜人または欠巻X等はそれぞれ成立しうであらうか。あるいは否定されねばならないであらうか。連断はもとより許されないが、もしかりにすべて成立つとすればどういふことになるのであらう。

この場合、まづ「日の宮」と帚木以下三帖についていへば、池田博士のほかはいづれも「日の宮」の消失を故意のものとして見られるやうであり、玉鬘以下十帖と桜人または欠巻Xとの關係についても同様であるといふことに注目しよう。それは次のことを意味するものである。即ち、源氏物語は構想の展開においても、執筆順序においても現形の卷々の順に従ふ單純な経過をとるものでなく、創作時期を異にし、作者の体験・思想・感情の変化も少

からぬ二系列の作品群の複雑な結合であつたかも知れない。しかしこのやうな二系列の結合は、すでに一つの意志により、單一な長篇の構想の下に統一的になされたものであり、第二部以下はこの統一を基盤として成長し發展していったといふことである。従つてわれわれがこの物語の第一部において、たとへ、卷々のつながりの上の不自然な停滯、短篇的要素と長篇的要素との不調和な交錯、主題をへづれた挿話の偶然な展開などといふ作品の品位にかゝはるかと見える若干の欠陥、不備を指摘しようとしても、それらはすでに作者（統一者）によつて許容せられたものであり、現形はそのまゝで欠けるところのない原形として扱ひうることである。（池田博士説のやうに、偶然の理由によつて消失し、補ふすべのないまゝに現形に至つたといふ時、問題は別となる。）

しかしこのことによつて、叙上の成立論議が無意味になることはむろんないのである。やはり、このやうな欠陥、不備と目されるものが、必ずしも古代物語に本来の様式であつたものでもなければ、また作者の能力の如何にもよらぬ、むしろ種々の偶然によつて強ひられた制作過程の多元性の中に、より多く基いてゐたことが立証されることによつて、この稀有の物語が包蔵する複雑さの諸性質を究明する、一の有力な手段が確立されたことになるのである。

平安時代研究特集にちなんで、最近の源氏物語研究の動向を紹介することをすゝめられ筆を執つたのであるが、恕卒のことゝてわづかに成立論にとゞまり、しかも解説とも批評ともつかぬものになつたことを耻づかしく思ふ。知りつゝ見及ばなかつた論文もあるが、私の最も懼れるのは、誤読と誤解との上に立つて性急な要約を試みてはゐないかといふことである。諸家の御寛恕をお願ひ申し上げる。（二七・四・一五）

—大阪大学助教授—